
芸劇リサイタル・シリーズ「VS」 Vol.6

務川慧悟 インタビュー

「VS（ヴァーサス）」というタイトルのインパクトが強いこのシリーズ。務川慧悟は、音楽にはけっこう「対決」の要素があるのだという。

務川「音楽ではあまり使わない言葉ですけども、演奏には『ヴァーサス』的。2 台ピアノにしても協奏曲にしても、室内楽においても、あらゆる共演には、寄り添うだけでなく、音楽的には戦うような瞬間があると思います」

〈ピアニスト 藤田真央について〉

藤田からの指名で実現した「初対決」。互いに言葉を交わすようになったのは最近だが、務川は 5 歳年少の藤田の活躍に早い時期から注目していた。

務川「最初に彼の名前を知ったのは、彼が全日本学生音楽コンクール小学校の部で第 1 位になった時（2010 年）。三善晃の《ピアノ・ソナタ》を弾いたのですが、僕も中学生の時に弾いたことがある曲で、あのかなり渋い曲で 1 位を獲ったのか！というのが最初の印象でした。そのあと、その三善やベートーヴェンのソナタを弾いたデビューCD を聴いて、巨大な才能を感じました。これはすごいピアニストになる。だからその後の活躍は予想どおりです。

彼の演奏はすごくナチュラル。努力家で、かなり細かく練習すると聞きましたけど、彼の演奏のあらゆる表現が、考え込んだ結果ではなく、ごく自然にそこに出てきたように聴こえるんですね。努力から出てきたとは思えないようなナチュラルさがある。それが非常に魅力的です」

公演に寄せたメッセージの中で、藤田は音楽の作り方にまつわる務川への共感を示しているが、もちろん務川もそれを感じている。

務川「実は彼としっかり話をしたのはまだ 1、2 回だけなのですが、その時に、僕も彼と自分の音楽の作り方が似ているなと感じました。演奏の感情みたいなものは最後に出てくる。まずは和声の配置や音のバランス、イントネーションをわりと数学的に考えていて、その小さな具体的なことの積み重ねが最後に大きな流れになるイメージです。先にもっと感情やイメージが浮かんで、そこから作っていく人もいると思うんですけど、僕らはそうじゃない。その点で非常に一致しています」

〈2 台ピアノについて〉

今回彼らが弾くのは 4 手連弾と 2 台ピアノ。同じピアノ・デュオといっても、連弾と 2 台ピアノとでは対極的といえるほど意味合いが異なると話す。

務川「たとえばモーツァルトは、連弾曲はかなり書いていますが、それに比べると 2 台ピアノの曲は少ないですよ。連弾はサロンや家庭の楽しみとして弾くために書かれているので、やはりソロや協奏曲では聴けないような、親密な雰囲気の魅力です。

2 台ピアノの魅力はそれとかなり対極にあります。非常に迫力ある響きと音楽を作り出せるということ。ピアノは 88 鍵の倍音を駆使してとても豪華な音を作り出せる楽器ですが、それを 2 台でうまく演奏すると、互いの 88 鍵が共鳴して魅力が増大します。たとえば、ペダルを踏んでいる場合、一方のピアノの音がもう一方のピアノの弦に共鳴する。互いの弦が共鳴して響きが増大するという面白さがありますね。

ただそれは簡単なことではなく、タイミングが一瞬でもずれると、それだけで共鳴の度合いが変わってしまう。室内楽の中でも特に難しいジャンルだと思っています」

〈プログラムについて〉

プログラムは藤田からの提案。3曲の「舞曲」で構成されている。

務川「次第に分厚くなっていく流れですね。シンプルな連弾のドヴォルザークから、音数は多いですが優美さのある《ラ・ヴァルス》。そして恐ろしさも感じさせるような真っ向勝負のラフマニノフ。お客様も、だんだん聴くのに体力が必要とされるような作品になっていくと思います」

どの曲にもオーケストラ版が存在するという共通点もある。

務川「《スラブ舞曲集》は、実はテンポの変化がとても多い作品です。オケ版も有名ですが、もしかしたら連弾のほうがダンスの微妙なリズムの揺れが表現できるのではないかと思います。

《ラ・ヴァルス》はオーケストラ版もピアノ版も、どちらの編成でも作曲家の魅力が出ているのがラヴェルのすごいところ。自分でもそれを確信して書いていると思います。この曲は、もちろんフランス音楽の特徴であるエスプリを持っているんですけど、ウイナ・ワルツへのオマージュという一面も持っています。最もよく弾かれる2台ピアノ曲のひとつですが、実は技巧的に非常に難しく、それをクリアしながら二人でウイナ・ワルツのリズムを柔軟に共有しなければなりません。

ラフマニノフの《交響的舞曲》は僕は初めてです。噂によると難しいと聞いています（笑）。一般的なラフマニノフのイメージは、美しいメロディでモダンなロマンティズムを発揮したということだと思うんですけど、実は美しさの追求というのは交響曲第2番やピアノ協奏曲第3番あたりで、すでに最高潮に到達していて、それ以降はリズム的な作品、特に古い音楽へのオマージュを示した作品が増えてきます。《パガニーニ狂詩曲》や《コレリ変奏曲》もそうですよね。この《交響的舞曲》もその流れの中にあって、もちろん美しいメロディの要素も残っていますが、土着的なリズムを活用した、縦に刻んでいくような音楽が聴かれます。それがかなり分厚い音で書かれているので、これこそまさに2台ピアノの迫力を伝えてくれる作品だと思っています」

《ラ・ヴァルス》の作曲家ラヴェルは務川の主要なレパートリーのひとつ。11月末にはピアノ独奏曲全曲を弾いたアルバムもリリースした。ラヴェルのどんな魅力が務川をとらえているのだろう。

務川「ちょうど今CD用の原稿に（※このインタビューは10月に行われた）、ラヴェルは大好きだけれど、その魅力をひと言で表すのは無理と書いていたんです（笑）。ピアノ印象主義のパイオニアでもあるし、オーケストラの魔術師でもあるし、スペイン音楽の理解者でもあります。あとはバロックへのオマージュも。そういういろんな面で、彼ほどの完成度を示した作曲家はなかなかいません。その多様性、多面性の融合みたいなことが僕にとってのラヴェルの魅力ですが、同時にそれが理解を難しくさせている要因でもあると思うのです」

そんなラヴェルの魅力を発見したのは、実はパリに留学してからのことだったそう。

務川「留学前は、フランス音楽だとドビュッシーのほうに親近感を感じて、よく弾いていました。ラヴェルは《水の戯れ》と《ソナチネ》ぐらいで、ほとんど弾いたことがなかったんですけど、フランスに来て、《クーブランの墓》とか《鏡》とか、より成熟した作品を弾いた時に、非常にナチュラルに弾けたんですね。これは感覚的な話なんですけど、ドビュッシーは好きで弾いていたものの、かなり工夫して弾かないとなかなか自分のものにならない。ところがあまり弾いていなかったラヴェルは、いざやってみるとすごくナチュラルに弾けた。ラヴェルのピアノ・ソロ曲というのは全部弾いても2時間ぐらいですから、それなら全部

勉強してみよう。2～3 年かけて勉強していく中で、非常にいろんな魅力を発見して、これは自分にとって最も大切な作曲家の一人になるのじゃないかなと思うようになりました」

藤田の魅力を「ナチュラル」と評したが、務川もまたそれを大事にしているのがわかるラヴェルとの出会いのエピソードでもある。

ちなみに今回のプログラム以外で弾いてみたいデュオ作品を尋ねると、「モーツァルト！」と即答。いつかぜひ！

務川「東京芸術劇場で演奏するのは今度で 2 度目。非常に心地よい印象を受けたので、今回も楽しみです。しかも藤田さんとの共演。彼の演奏を耳にする機会は多くて、いつ聴いてもいいなと思いますし、成長しているのも感じます。その彼とできるのがうれしい。今回はそれに尽きますね」

インタビュー・文／宮本明（ライター）

※このインタビューは東京芸術劇場広報誌 BUZZ Vol.42 号をものにしたインタビューのロングバージョンです。